

### 3. さし木苗の育苗試験（その2）

主任研究員 斎藤勝男  
主任研究員 伊藤輝勝

#### I 目 的

②の試験の目的と同じである。

#### II 試験内容

昭和56年度は、大沼郡会津高田町大字旭三寄の民家裏の畑で行った。特に、今年度は前年の補足試験として、クローン別挿付試験としたが、供試クローンおよび挿付本数は表-1のとおりである。

##### 1. 試験の方法

穂木の大きさは原則として30cmとし、山砂に、100本/m<sup>2</sup>の割合で畦ざし法によって挿付けた。

なお、挿付後1mの高さ及び周囲を、遮光率60%のダイオシェードで覆をした。散水その他の作業は常法により行った。

挿付け時期は、5月1日～2日であり、処理薬剤はオキシベロン（インドール酪酸系）の粉剤である。挿付クローンのうち、飯豊スギ、地スギは無処理である。

#### III 結 果

試験の結果は、表-1のとおりである。

クローン別の発根率は、80%以上のものが9クローン、80～60%のものが7クローン、60%未満のもの4クローンと予想外の発根率であった。

今回は、吾妻スギ、地スギを除いてすべて薬剤処理とし対照区を設けなかったため、薬剤の処理効果を論ずることはできないが、前年度の結果から想定しても、処理効果は期待できるようである。

用土については、前年度と同じ山砂を用いたが前年に比べると予想外の発根率で、その年の地中温度や水分の条件が整えば、山砂も用土として十分可能性があると言えるようである。

最後に、発根率と熟根率の関係については、発根率の高いクローン程熟根率も高いようである。発根能力の高いクローンは、発根後の熟根化能力が高いものと推察される。

#### IV おわりに

2年間の成果をみると、会津においても平年であれば十分さし木苗養成は可能であると思われる。しかし、発根時期の地温の低い年に、しかも完備した施設の無いところではどのように発根率・熟根率を高めるか、また、農作業との競合をどうカバーするか、挿付用品種を採算性ともならみどのように定め利用するか等が今後解決を要する問題であると思われる。

表-1 スギクローン別の挿木試験

No	クローン名	さし付本数	発根状況(本)				発根率	熟根率
			発根(熟根)	カルス	未発根	枯		
1	南 会 1	54	29 ( 9)	13	6	6	53.7%	31.0%
2	" 4	50	21 ( 6)	18	2	9	42.0	29.0
3	" 5	53	53 (51)	0	0	0	100.0	96.2
4	" 6	59	53 (36)	3	0	3	89.8	68.0
5	" 7	65	47 (29)	7	0	11	72.3	61.7
6	" 8	40	7 ( 0)	11	0	22	17.5	0
7	" 9	46	28 (11)	10	0	8	60.9	39.3
8	" 10	79	69 (31)	3	0	7	87.3	44.9
9	" 11	54	50 (29)	4	0	0	92.6	58.0
10	北 会 1	51	40 (25)	10	0	1	78.4	63.0
11	" 2	62	57 (23)	0	0	5	91.9	40.4
12	耶 麻 1	58	55 (47)	1	0	2	94.8	85.4
13	" 2	63	39 ( 4)	15	5	4	61.9	10.3
14	大 沼 1	76	39 ( 4)	31	0	6	51.3	10.3
15	" 2	85	80 (62)	3	0	2	94.1	77.5
16	河 沼 1	29	28 (18)	1	0	0	96.6	64.3
17	本 名	459	335 (71)	49	0	75	73.0	21.2
18	吾 妻	200	120 (66)	60	2	18	60.0	55.0
19	飯 豊	251	190 (51)	22	0	39	75.7	26.8
20	地 スギ	96	91 (73)	5	0	0	94.8	80.0
	平 均						74.4	